学 会 名	第31回日本慢性期医療学会 （ 2023年10月19日～20日） 開催日を記入
研究テーマ	退院に向けたADL改善への取り組み
病 院 名	医療法人社団 健育会 竹川病院
演　　者	○発表者 岡野 日奈子（看護師） 共同研究者 斎藤香織（看護師）

概　　要

【研究背景・研究目的】
リハビリテーションにより改善した身体機能を生活の中で発揮できるように援助することは、回復期の看護において重要である。KOMIチャートシステムを用いて患者の“持てる力”“健康な力”“残された力”に着目しケアを行った結果、排泄が自立し、自宅退院に至った症例のケアを振り返り報告する。
【患者紹介】
N氏、80代女性。発症直前まで就労し、ADL・IADLは自立していた。
延髄梗塞発症し、保存的加療。右上下肢に重度不全麻痺が残存し、ADLは全介助、リハビリ目的でA病院入院。
【研究方法・倫理的配慮】
入院時に書面での説明と同意、A病院倫理委員会で承認を得た。
【結果】
入院後、麻痺側の疼痛により臥床傾向で、トイレでの排泄に消極的だった。疼痛が軽減し、起居・移乗・装具の着脱が見守りレベルに改善した。日中は離床時間が延長し、尿意を訴えトイレで排尿でき、失禁も軽減した。できないことへの意識が強かったが、患者の思いに寄り添い2か月後には日中車椅子自立、失禁なくトイレ動作自立に改善した。しかし、夜間はオムツ着用と失禁が持続したため、ポータブルトイレの設置を提案し導入した。徐々に夜間のトイレ誘導を開始し、退院後の生活をイメージできるよう関わった。退院前には歩行器歩行自立、排泄も自立した。
【考察】
N氏が疾病により排泄という営みを自分の意志で行えない苦しみや戸惑いに寄り添い、自立していた時の状態に近づけるよう介入が出来た。Ｎ氏の自己肯定感の低下が生命力の消耗に影響し、オムツ失禁に繋がっていると考え、“持てる力”に着目したことが成功体験となり、自信に繋がったと考える。
【結論】
生命力の消耗につながる事柄、患者の持てる力・健康な力を把握することはその人自身をよく知ることでもある。マイナス面に寄り添い不安な気持ちに共感することが、その人の持てる力を引き出すケアとなり、生活を再構築することに繋がったと考える。
【引用参考文献】
1）フローレンスナイチンゲール　看護覚え書　看護であること看護でないこと（改訳第7版）現代社、薄井坦子、小玉香津子他訳
2）ナイチンゲールの「看護覚え書」イラスト・図解でよくわかる！　西東社、金井一薫編著
3）看護の力　岩波新書、川嶋みどり